

《小野塚報告について》

I. 二つの経済思想史

経済学史学会に所属する会員の学史研究のタイプは、経済理論史（経済学説史）、経済思想史（経済政策思想史、日本経済思想史を含む）、経済、政治、哲学等の広域の言説を包摂した社会思想史の三つに大別される。経済史にもその「一分科」として経済思想史(6、報告ペーパーの頁。以下同じ)があるといわれているので、経済思想史は経済学史と経済史とをつなぐ太い糸といえます。経済史の一分科としての経済思想史の方法と根拠について次のようにいわれている。

過去の史料から、当時の人びとによって必ずしも言語的に認識されていなかった経済過程・社会関係・事象・行為を再構成できるのは、史料に記されている言語自身が何らかの思想や価値観に基づいているからです。言語を成り立たせている思想・価値観に注目すれば、その史料に記された言語を子供の遣いのようにして再現するだけでなく、史料が意味し、指示している経済過程・社会関係・事象・行為を炙り出し、また、そこに作用し、そこに表現された人びとの必ずしも言語化されていない思想を再構成することができるのです。(6)

引用文の「史料」を理論家や思想家が遺した「テキスト」に置き換えると、小野塚さんの言は、そのまま経済学史の一分科としての経済思想史の根拠、方法ともなります。経済史が素材とする言語化された「史料」が、当時の人びとの「言語化されていない思想」をそのまま表現（代弁）するものでないにもかかわらず、後者の思想を再構成することができるように、経済思想史（広くは学史）の研究対象である「学者・偉人・賢人たちが意識的・自覚的に表明した学説・思想」(6)がその時代の「普通の人びとが日々の生活の中で実践してきた思想」(6)を直接反映したものではないとしても、かれらのテキストに綴られた言語と論理をたどることで、その時代の「経済過程や社会関係」のみならず、言語化されていない同時代の人びとの「思想」をも読み取ることができるのです。つまり経済学史のテキストも経済史の史料も或る時代、或る社会の「歴史的な資料」なのです。そうみなせば、<学史の経済思想史>と<経済史の経済思想史>の「アプローチ」と「再構成」の手続きは違っても、両者の対話は成り立つように思われます。かつて大塚久雄さんがチャールズ・キングの『ブリティッシュ・マーチャント』（1721）を活用して経済史を論じた先例がありますし、現在の学史における経済思想史研究も経済史の研究成果を吸収し、経済史との垣根を飛び越えようとしています。

小野塚さんが過去の偉大な理論家や思想家の学説・思想は「明晰に言語化・文字化された高尚高踏」(6)なものだといわれるのは、学史家の事大主義を暗に批判したものかもしれ

ませんが、そこに誤解もあるように思われます。歴史に名を印したどんな偉大な学者、思想家でも、彼らの遺したテキストには視野の限定や視点の偏りだけでなく、論理の矛盾や不明瞭な論述などがみられます。学史研究はテキストのなかから論理矛盾のない明晰な言説、言語のみを選び取って解釈しているわけではありません。「不明瞭で矛盾に満ちた言語」(6)にも同じように注目します。そこには理論家や思想家の意図を越えるもの、たとえば著者が捉えようとしたものとは異なる時代や社会の複雑な相が、あるいはその社会の狂気さえもはしなくも顔を出しているのです。明晰と不明瞭、本筋と逸脱、正視と錯視といった両にらみの読みは、<いかなる人も世界を隈無く明晰に語り尽くすことはできない>という認識と叙述の限界つまり言葉の限界と、さらには<人間は矛盾に満ちた存在である>という人間観とを背後に置いています。

## II. 経済学史研究批判に対して

小野塚さんは経済学史研究の現況に、婉曲な表現ながら厳しい批判を向けられている。

- ①学史家は過去のテキストを「子供の遣いのように再現」(6)する所為に終始しているのではないか。
- ②学史家は「歴史の総体」(4,5)ないし「人間=社会の諸現象の総体」(5)を捉えようとする志向をもたないのではないか。
- ③経済学(親亀)の終焉とともに経済学史(子亀)の消滅も予見されるのに、学史家はその危機感をあまり感じていないのではないか(10-11)。

私見であることをおことわりして、批判に簡単に応えてみます。

第1の批判に対して。経済史家が「史料」を眼光紙背に徹して解読するとすれば、学史家もテキストを同じようにして読む、という基本に立ち返るしかない。「子供の遣い」のような読解と揶揄されないよう、テキストの言葉を額面通りに受けとって再現するような単純、簡便な読みを避けたいものです。自分の感性と知見が——漱石のいう「自己本位」——が頼りです。

第2の批判に対して。「総体」といわれるものが何なのか、それをどのようにして把握できるのかは別にして、この批判の眼目は、経済学史家の「史」にたいする認識が浅いということでしょう。過去の或るテキストを俎上に載せれば、自動的に経済学史研究になるわけでもないし、さまざまなテキストを或る基準にもとづいて時系列に並べて解説すれば経済学史になるわけでもないことは、学史家も心得ているはずですが。経済学史が「史」を標榜できるのは、過去のテキスト(群)が学史家の読みを通して歴史的現在として立ち現れるからです。その瞬間に立ち会うには、既成の学史の語り方を疑い、学史家それぞれの読み方の「方法」を絶えず試行することも必要だと考えています。

第3の批判に対して。親亀が転ばないように、子亀が手を貸すことができるのか、ある

いは親亀が転けても、子亀は、経済史のように、しぶとく生き残る方途があるのか。学史家の存亡の危機意識が薄いとは思いません。現に学会創立70周年記念としてこのシンポジウムが企画されたのも、その危機意識のあらわれでしょう。しかし経済学史の命運を蝶蝶するのは、<葦の髄から天井のぞく>ようなもので、わたしには憚られます。

《瀧澤報告について》

20世紀後半以降の経済学は下位領域 — ゲーム理論、実験経済学、行動経済学、神経経済学など — を開発して変容を続けているようですが、その変容が「経済学の外部で生みだされた分析ツールや発想が経済学の中に入ってくることを通して生みだされてきた」(4)ものだとすれば、経済学史研究は現代経済学の変容・革新に無力であったし、今も無力だということでしょう。経済学史家が「分析ツール」の開発はともかく、なぜ斬新な「発想」を提示できなかったのでしょうか。社会の役に立つ研究、研究内容の分かりやすい説明といった声に気圧されて、学史研究は社会に受け容れられやすい無難なテーマに傾いていないだろうか。役に立つ、分かりやすいと受け容れられやすいとは大きな違いがあります。そうした学史物語であれば、自分も書くことができるという自信を理論家に与え、ますます学史家の言に耳を傾けなくなるでしょう。

現代の経済的、思想的な枠組みを揺らすような、ときには反時代的な「毒」をも含んだ学史研究によって、「もはや過去で食える時代ではない」という理論家たちの毒のある放言に、一矢報いたいものです。若い後進の道を拓くためにも。

他方で瀧澤さんの示唆に従えば、経済学史研究も変容の可能性があるのであります。経済学が数学や心理学や脳科学や統計学などの成果を取り入れたように、経済学史も経済学以外の社会科学や人文科学や自然科学、さらには芸術や文学にも開かれたものになれば、経済学史を再生させるきっかけとなるかもしれません。荷が重いことですが、学際的な素養と芸術的感性が求められているようです。